

就任のご挨拶

北海道医師会役員就任ご挨拶

常任理事

旭川市医師会
旭川市病院事業管理者

青木 秀俊



このたび、第149回定時代議員会にて常任理事にご承認いただきました青木でございます。4年間活躍された林宏一前常任理事の後任として、山下裕久旭川市医師会会長、後藤聡北海道医師会常任理事のご推挙を頂きました。

私は昭和49年に北大を卒業し、北大第二外科に入局。一般外科等を研修後、心臓血管外科を専攻。北大病院、国立循環器病センターで研修後、昭和57年市立旭川病院胸部外科に赴任。1年で帰局の予定が今日まで約35年間在職。院長職を9年間務め2年前に退任、現在旭川市病院事業管理者として大変厳しい病院経営状況のなかで悪戦苦闘中であります。

医師会との関わりは、10年ほど前に故増田一雄旭川市医師会会長の下で副会長を4年間務めました。今回、私の道医での会務分担は、小熊副会長の管掌の下で医療安全医事法制部長を、目黒救急医療部長の下で副部長を、櫻井学術部長の下で部員を担当することになりました。

さて、医療事故調査制度が開始され1年6ヵ月が過ぎましたが、いまだ制度への理解が不十分であります。本制度の基本的概念は、責任追及ではなく、原因究明から得られたものを再発防止に繋げることにあります。また地域医療構想と地域包括ケアシステムが次第に明らかとなり、行政側や医療界でも具体的に議論されつつあります。しかし患者さんや住民の皆さんの理解度はまだまだ低く、周知・啓発が同時に必要であります。

勤務医にとって喫緊の課題は、医師の働き方改革であります。以前から問題提起されていましたが、最近の裁判所判断や労働基準局の介入など待ったなしの状況にあります。

勤務医の経験しかない私ではありますが、北海道医師会会員の皆様のために頑張りたいと思います。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

北海道医師会理事に就任して

理事

江別医師会
医療法人英生会野幌病院 理事長

野呂 英行



このたび、中央ブロックからの推薦を受け北海道医師会理事に選出されました。

11年前江別医師会より代議員に選出され、改めて北海道医師会の抱える事業と課題の多さ大きさに気付かされると共に、役員諸先輩のご活躍とご苦勞に敬意を表してきましたが、微力ながらその一端を担うこととなり、責務の重大さに身の引き締まる思いです。

私事ですが、今年は昭和22年1月に父・野呂英三が野幌駅前に野幌診療所を開設して70年となります。父母の背中を見ながら医師を目指し、団塊の世代としての実感もあり、医療と介護の連携をライフワークと決め幾十年、一步一步夢を形としながら、来年春の地域密着型介護老人福祉施設増床を達成できた節目の年となりました。

医師会会長としても7年目を迎えました。お陰様で、他の医師会に比べ新規入会の先生も途切れず、世代交代も比較的順調と言われます。

それは同時に、医師会も確実に若返りが求められているということでもあります。26年の総会に続き昨年6月の役員改選でも、若く意欲に燃えた新役員が誕生し、いずれも積極的に医師会運営に参加し大きな戦力となっています。

今年は江別市が健康都市宣言を行います。より多くの若い会員の声と力が、医師会の事業を通し地域を活性化させ、未来への光となることを信じます。

2025年問題を筆頭に、どうしたら、地域の日常の安定した医療、健康、福祉を守り向上できるのか、大災害時の救急医療へ適切な対応ができるのか、などの継続課題に、飽きず、諦めず、会員ならびに関係機関の皆さんとの果敢な挑戦が必要です。そのためにも、開業医・勤務医・大学医師の区別なく一致団結し、切磋琢磨する場としての北海道医師会の役割と、責任の重さを改めて感じております。2年間どうぞよろしくお願い申し上げます。

北海道医師会理事就任にあたり

理事

滝川市医師会
男澤医院 院長

男 澤 伸 一



6月17日の北海道医師会定時代議員会にて、空知ブロック（南空知、中空知）選出の理事に就任いたしました。微力ではありますが、北海道医師会の役員の皆様のご指導をいただき務めていきたいと思っております。

空知ブロックは、道央圏には近い距離にありますが、旧産炭地を抱え、大きな産業もなく、石炭産業全盛期の時期から人口減少、高齢化に歯止めがかかりません。

全国791市ランキングでも人口減少率の大きい市に1位夕張市4.10%、2位歌志内市3.82%、3位芦別市3.09%、4位美唄市2.85%、7位三笠市2.65%と10位以内に5市が含まれています。老年人口割合の大きな市にも、1位夕張市49.92%、2位歌志内市47.91%、4位三笠市45.94%、8位赤平市44.95%、10位芦別市44.13%と5市が含まれています。年少人口割合の小さな市には、2位歌志内市5.66%、4位芦別市7.19%、7位赤平市7.29%、10位三笠市7.74%と4市が含まれ、まさに人口減少、少子高齢化が全国一進んでいる地域となっています。このままでは空知ブロックの将来は厳しいものがあり、地域崩壊、地方都市消滅に向かっていきますし、今後の地域医療構想の策定にも大きな影響が出てくるものと考えます。

また、地域包括ケアでは在宅医療が求められてきますが、地方では、在宅医療を担う医療機関が不足しています。24時間365日対応が難しいのが一番の原因ですが「在宅医療グループ診療運営事業」の活用は有用であると考えています。代診制による医療提供体制、後方支援病院の確保、地域の多職種連携など一部に偏った負担に頼らない地域在宅医療が可能になります。しかし、残念ながら今年度で事業は終了の予定ですが、これに代わる事業を期待します。そして、在宅医療をやっていない私でもこれならやっていけるという在宅医療を考えたいと思っております。

これからも、地方のいろいろな問題を発信していきたいと思っております。

北海道医師会理事就任のご挨拶

理事

北見医師会
北見循環器クリニック 院長

今 野 敦



このたび、北見ブロックから、古屋聖児先生の後を引き継ぎ理事に選任していただきました。若輩浅学にて力不足とは思いますが、でき得限りの努力を致していく所存です。

私は「循環器内科」を標榜しておりますが、実情は「老年病科」です。特に高齢者の糖尿病や慢性腎臓病、透析治療を主とした有床診療所と、在宅へのリハビリを目的とした老人保健施設を運営しております。

超高齢社会の到来と共に、医療を取り巻く環境は大きく変化し、北網・遠紋医療圏全体に大きな課題が突きつけられております。北見市を例に取れば、医師数の絶対的不足、診療科ごとに見ても深刻な医師不足の科も多く、病診連携の逆紹介の受け皿となるべき診療所、特に内科系の診療所の不足も大きな課題です。さらに、診療所の医師の高齢化と後継者不足も深刻で、このまま新規の開業が増えなければ「かかりつけ医」が機能しなくなる事態も予想されます。

後期高齢者はさまざまな疾患を併せ持ち、多くの診療科が協力し合って治療を行わなければなりません。その際に必須なのが医療情報の共有であると考えます。手書きの紹介状一枚では情報量が全く不足で、治療の遅れにも繋がるものと考えます。介護保険制度の創成期に行われてしまった医療と介護の分断は、非効率的という大きな課題を突きつけております。病歴や投薬情報、検査結果等医療介護連携に必要な情報を共有することによって、患者・利用者の安全を図り、さらに医療介護スタッフ連携の促進が求められていると考えます。

高齢化が先行している当地域で、少ないスタッフでも必要な医療・介護サービスを不足無く受けることができるように、患者・利用者情報のスムーズな連携を図れる人的およびハード的基盤の整備に努力して参ります。

今後、微力ながら北海道医師会および北見ブロック医師会の発展に貢献したいと考えております。ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。